準備教育について

山下俊郎

(一)

昨昭和三十八年九月、教育課程審議会が幼稚園教育課程の改善について行なった答申の中でいわゆる準備教育についてふれている。この答申はいろいろの面で幼児教育の間に波紋を呼び起し、引き続き発表され今日実施されている幼稚園教育要領におけるいろいろの問題とともに、いろいろ論議されているのであるが、準備教育の問題も論議を呼んだ問題の一つである。わたくしたちは、単にこの準備教育の問題に限らないが、いろいろの問題について周到な吟味をすることが必要であることはこれを認めなければならない。しかし、その吟味は単に個々の問題を批判しこれを否定するという態度で臨むべきものでなくて、どこまでも建設的に、それがわたくしたちの愛する幼児のしあわせのために生かされていくように考えたいと思うのである。準備教育の問題もやはりこのような線に沿って考えたいと思う。

基本的な点についていえば、準備教育の問題は、教育課程改善案にとりあげられるよりもずっと以前から、わたくしたちが常に考えてきたことが、答申の形に具体化されたものであるといっていい。準備教育の弊がいちじるしく目立つようになってきたからよけいに答申の中に取りあげられることになったのだと考えられるのである。

(二)

わたくしは、いままで常に幼児教育はある意味においては小学校教育の準備教育であるが、またある意味においては絶対に準備教育であってはならないということを強調してきた。

そこでまず、幼児教育が準備教育であるということから述べてみよう。わたくしが幼児教育が小学校教育の準備教育であるというのは、幼児期という発達段階が児童期という発達段階の前の段階であって、幼児期を経ることによって児童期が成り立つということに根拠を置いている。いうまでもなく、子どもの成長発達の段階には、その段階の一つ一つに大切な意義がある。それぞれの段階には、ハヴィガーストのいう発達的課題というものが課せられている。そして、各々の発達段階の発達的課題を充分にはたすことができるように、わたくしたちがまわりから手助けしてやることが教育という営みなのである。したがって、幼児期という一つの発達段階の発達的課題が充分にはたせるようにわたくしたちの行なう営みが幼児教育である。

このことと同じ意味において、児童期の教育は児童期すなわち小学校時代という時期の発達的課題をはたすようにするところにその使命を持っているのである。しかも、このことが効果的に行なわれるために必要な最も基本的な前提は、児童期の前の段階である幼児期の発達的課題がはたされているということである。すなわち、幼児期という前段階がしっかりとしたものであってその基礎の上に児童期が立たなければ、児童期の発達は充分に行なわれないのである。したがって、幼児教育は、小学校教育の基礎を形作るものである意味において、小学校教育の準備をするものであり、準備教育であるといえる。

ただし、ここにいう準備教育は、幼児教育が、本来幼児期の持っている発達的課題をはたすものであることを意味し、本来的な充実した幼児教育であることを意味するものであることを忘れてはならない。

(三)

次に幼児教育が小学校教育の準備教育であってはならないという点について考えてみよう。

教育課程審議会で問題とした準備教育というのは、わたくしたちがいままで常に問題として来た点と同じであるが、それはよく一部の幼稚園や保育所および家庭で行なわれているもので、小学校に入学してから学習すべき事柄、とくに知的な学習的な事柄を、入学前につめ込むという教育である。いってみれば、小学校に入ってから習うべきことを先走ってあらかじめ身につけさせておくことによって、子どもたちを少しでも有利な立場に置こうとする一種の浅まし

い利己主義に基くものである。

このような傾向はかなり以前から現われているが、他の園でやっているから自分の園でもやらないと立ち遅れる、父兄がこれを強く要望するからその希望を容れる、というようなことを園としての経営の上からやらざるを得ないといったことが、幼稚園にも保育所にも見られる場合が少なくなかったというのが現状であろう。このような知的内容を幼児期のうちに、つめ込むといった形の準備教育は、本来の幼児教育を破壊するものとして、絶対に排されなければならない。

(四)

このような間違った準備教育の考え方の根底には、いわゆる知育偏重の誤りが横たわっているとわたくしは考える。もともと教育の形については、読み書き計算という知的内容の学習が教育であるという考え方が、洋の東西を問わずまず行なわれてきていることは、教育の歴史をみればおのずから明らかである。しかし、このような知的内容の学習ということは、教育という営みの全体から考えるとき、たしかに重要な一面を形作ってはいるが、これが教育の全部ではない。ことに、小学校時の児童期においては、この時期がある心理学者によっては「学習の時期」と名づけられるくらいであって、知的学習がかなり重要な位置を占めてくるのであるが、幼児期においてはそうでない。知的内容の先走ったつめ込み、小学校に入ってから習得すべき知的内容を先走ってつめ込むということは、幼児期の重要な発達的課題にそぐわないのである。わたくしたちは、知的内容を早目につめ込むといった式の準備教育は、それが幼児期の発達的特質に全くそぐわないものである意味において絶対にこれを排するものである。

そして、このような準備教育を排するということは、このような否定的、消極的意味において排するだけでなく、わたくしたちが幼児教育において積極的に推進すべきものがあるからである。この積極面を考えることによって準備教育が排されるだけでなくて、幼児教育において推進さるべき積極面が浮かびあがってくるのである。このことを次に考えてみよう。

(五)

幼児教育の進めらるべき内容は少なくとも三つの面にあるといえるであろう。それらは一括して言えば、生活の充実と指導ということになるのであって、知的学習よりも生活指導が幼児教育の中核であるとわたくしは言いたいのである。

生活指導ということの内容を、今ここに詳しく説く余裕がないの

で、きわめて簡単に述べるに止める。生活指導の第一は基本的生活習慣を確立することである。そしてその第二はいわゆる社会性を養うことである。さらに第三は豊かな情操をつちかうことである。基本的生活習慣によって個人としての生活の充実が図られ、社会性を養うことによって社会人としての生活の伸長が目ざされる。そして情操をつちかうことによって豊かな人間性の基礎が養われる。このような三つの面の豊かさはそのまま道徳性の成長にもつながるといってよいので、わたくしはここにわざわざとってつけたように道徳性というようなことばを持って来なくてもいいくらいに考えるものである。むしろ、ここにもう一つ重点をおいて加えらるべきものがあるとすれば、安全教育という生活指導を、今日の社会における重要性から加えるべきであるといえよう。

このような、幼児教育の中心的積極的面を描き出すことによって、準備教育はおのずから後退せざるを得ないことになるのである。わたくしたちは、幼児教育を正しい姿に持って行くようにつとめることによって、誤った姿としての準備教育をしりぞけて行くような結果に導くことを期待したいと思うものである。

(六)

誤れる知育偏重の産物である準備教育を排し、生活指導に中核を置くことの正しさは、以上に論じた通りであるが、最後に一つ追加しておきたい問題に、さきにふれた形よりももっとゆがめられた準備教育の問題がある。それはいわゆるテスト準備教育の問題である。

大・中都市においては、附属校や有名校に子どもを入学させるために、幼児にテストの練習を一生けんめいにさせている父兄があり、そのような父兄の関心を買うためにテストの準備教育を居残り保育としてやっている園があり、さらにもっとひどいと思われるものにこれらのテスト練習の塾が行なわれているという事実がある。

このような事実が行なわれていることは、根本的には右にすでに論じてきた幼児教育の在るべき姿をさること誠に遠いものがある。まことに残念なことである。テストの準備教育は、幼児の成長に対してけっしてプラスにはならない、むしろマイナスの面ばかりである。これに費す時間と努力とを、幼児期本来の発達的課題を示す方向に持って行ったならば、幼児はさらに幸福な成長をとげることができることを、親も保育者も考えるべきである。